

あけましておめでとうございます。

ここ2~3年で私たちの暮らし向きが大きく変わったことのひとつに、あちこちから携帯電話の音が聞こえてくることがあげられます。今後、携帯電話やEメールをはじめ、情報伝達手段のパーソナル化とコンビニエンス化(すぐできる)が進む中で、益々、個々のネットワークが大切な時代になるのではないかと思います。

本年も自己主張がある「よかネット」づくりを目指していきたいと思いますので、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひします。

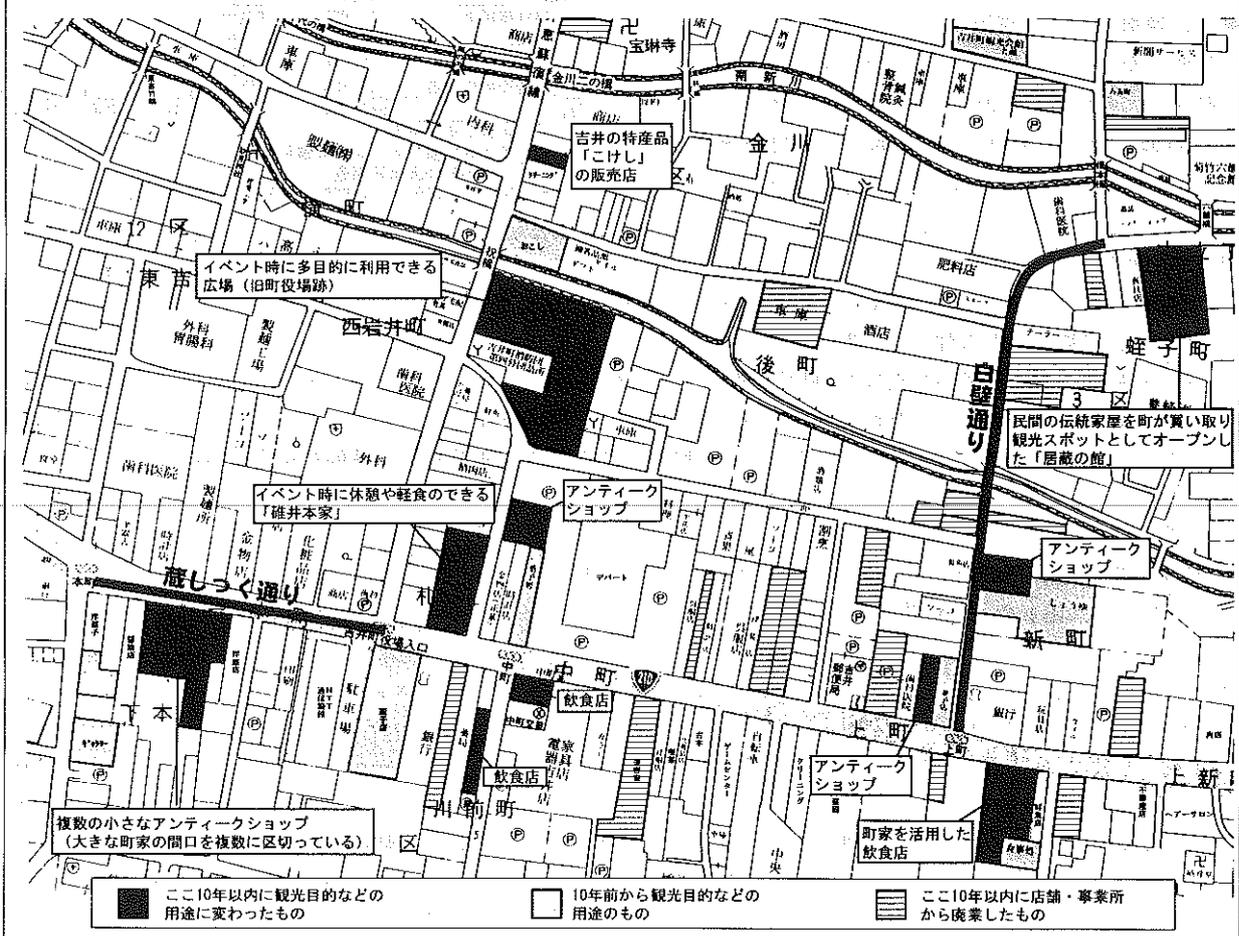
平成12年1月1日

所員一同

●まちのファンが増えると、商店等も観光客をもてなす内容に変わってきた

下図は白壁の町並みが残る吉井町の中心街における建物用途の変遷をみたものである。吉井町では近年、数多くのイベント等によって吉井のファンを増やしている。また、文化庁の保存地区に選定されたことで、補助金によって町並みが整備されつつある。しかし一方で、周辺にはスーパーや郊外店がいくつか立地しており、地元商店等は業種によっては厳しいところがあると思われる。そこで、この中心街の業種の変化を現在と10年前の住宅地図の比較によって調べた。お客さんが地域住民中心から観光客中心へと変わると、店も観光客をもてなすものへ変わっていくようだ。

※関連記事は10頁



高齢者はどこを終の住処としていくのだろうか

～高優賃制度を通して考える～

山田 龍雄 伊藤 聡

高齢者の親族との同居意向が低下していく中で、高齢者向け優良賃貸住宅をはじめいろいろなスタイルの高齢者住宅の供給がなされてきている。このような中で、将来、高齢者の方々はどこに住むようになるのが気になり、少し考察した。

平成7年度の国勢調査によると全国の65歳以上の高齢単身世帯は220万世帯、高齢夫婦世帯は276万世帯(夫65歳以上、妻60歳以上)合わせて496万世帯であり、世帯総数4,410万世帯の約1割強を占めている。また、高齢者がいる世帯(子と同居など)まで含めると1,287万世帯と総世帯数の実に3割となる。つまり3世帯に1つは65歳以上のいる高齢者世帯、10世帯に1つは高齢単身か高齢夫婦世帯なのである。一方、居住形態をみると全国で高齢者がいる世帯の8割強が持家世帯である。

●今、高齢者のいる場所

高齢者が住宅、施設を含め、今どこにいるのかという数字を、全体として把握している統計がないようなので(国勢調査では施設入所者は施設で1世帯と数えられていたりする)、いくつかの統計をあわせながらみる

と、福岡県の場合、一般の住宅に93%、ケアハウスなどの高齢者向け住宅に0.6%、特別養護老人ホームなどの施設に6~7%程度となっているようである

全国の2000年の推計値(計画を含む)では、高齢者向け住宅は1.3%、施設は8%程度とされており、福岡県は高齢者住宅の割合が全国の半分以下と低い。

表1 高齢者の居場所

単位:世帯又は戸

	福岡県		全国 *4	
	世帯数	割合	世帯数	割合
一般住宅	504,217	92.72%	9,917,604	90.52%
持家	401,523	73.84%*1		
公的借家	40,207	7.39%*1		
民営借家	57,401	10.56%*1		
給与住宅	2,911	0.54%*1		
間借り	2,175	0.40%*1		
高齢者住宅	3,116	0.57%	146,565	1.34%
シニアマンション	148	0.03%	13,080	0.12%
軽費老人ホーム	1,452	0.27%*2		
シニア住宅			2,693	0.02%
ケアハウス	625	0.11%*2	100,000	0.91%
有料老人ホーム	891	0.16%*2	30,792	0.28%
施設	36,444	6.70%	891,831	8.14%
特別養護老人ホーム	10,965	2.02%*2		
養護老人ホーム	2,637	0.48%*2		
老人保健施設	9,476	1.74%*3		
療養型病床群等	13,366	2.46%*3		
計	543,777	100%	10,956,000	100.0%

*1:平成7年国勢調査

*2:平成9年福岡県老人福祉施設要覧

*3:平成10年介護保険調査

*4:国立社会保障・人口問題研究所による2000年推計

もくじ

NETWORK

高齢者はどこを終の住処としていくのだろうか ~高優賃制度を通して考える~	2
福岡市は“風格のある都市”へ歩むべきだ	
—福岡市の都市問題の視点はY0時代の遺伝子の再発見から—	6
町並み保存には賑わいづくりが欠かせない ~白壁の町、吉井を通して~	10
地域もどことつきあうとプラスになるか考える時代に3 ~田舎で仮想里帰り体験を子供たちに	12

見・聞・食

農業も地域も、“かあちゃん”が支えて“とおちゃん”が応援	15
「トリアス久山」の元気の素は何か	17

近況

「I Love 遠賀川ものがたり」を聞いて	19
民間が主催して行政が応援した「国際住環境サミット in 福岡'99」	20
大学の変革期	21
所員近況 手作りのXマス・イルミネーション/タオルとモラルをもって温泉へ	
幻の日本シリーズ第6戦チケット	21

●高齢者はいつまでもそこに住み続けるとは限らない
 高齢者は現在の家にいつまでも住み続けるかという
 と、必ずしもそうではない。福岡県の場合、5年間で65
 歳以上の14%は居住地が変わっている（平成2年国勢
 調査）。この中には特別養護老人ホームなどの施設等へ
 の移動も含まれている。単純にみれば、10年間で3割
 近くの高齢者が移動することになるが、途中で死亡し
 た分は含まれていないので、実際には要介護となった
 時点などでもっと多くの高齢者が移動していると思わ
 れる。

住宅に住んでいる世帯について高齢者の移動をみる
 と、世帯主60歳以上の世帯で5年間に11%が移動して
 いる（表2）。そのうち借家から借家への移動が半数を
 占める。また、持家を捨てて借家へ移動する世帯も約
 15%（6,300世帯）いる。

つまり、今の住まいが終の住処でない人が結構いる
 のである。

●このまま維持できるかが気になる高齢者居住地問題

これまでに高齢者関係の居住問題や地域問題に関わ
 ってきた中で、将来、ここに住む人たちはどのように
 なるのであろうかと気になる地域がいくつかある。

《昭和40年代に開発された戸建て団地》

開発団地については、共通の問題を抱えているところ
 が全国に多くあると思われる。福岡県でも、昭和40
 年代に開発されたところでは一挙に高齢化が進展し、現
 在、係わっているある町の住宅団地では高齢化率約47
 %となっている。それに加え、開発指導要綱のない時
 代での開発であったため街区道路も4m程度と狭く、十
 字路では車がろくに曲がれないなど、若い世帯が引き
 継ぐには魅力が乏しい団地となっている。ここの高齢
 者の方は、もし町外に出ていった子供たちが戻ってこ
 なければ、土地や住宅などの資産はどうなるのであろ
 うか。

表2 高齢者世帯の移動 福岡県

		従前の居住形態		
		合計	持家	借家
現在の居住形態	総数	405,800	302,000	103,800
	移動総数	43,500	15,000	26,600
	持家へ	14,800	8,700	5,600
	借家へ	28,700	6,300	21,300
	移動総数(対総数)	10.7%	5.0%	25.6%
	移動総数	100.0%	34.5%	61.1%
	持家へ	34.0%	20.0%	12.9%
	借家へ	66.0%	14.5%	49.0%

※世帯主60歳以上の世帯 平成5年住宅統計調査

《最近開発されているマンション団地》

福岡市でも西区のマリナタウンや百道浜のマンシ
 ョン団地、あるいは東区香椎浜のマンション団地のとこ
 ろは昭和60年代に開発され、現在、40~50歳代の世
 帯主が中心に入居している。このようなマンション団
 地では、15~20年後には居住者が高齢化し、戸建て団
 地と同様の問題が発生してくるであろう。小生もこの
 マンション団地群の一角に居住している身として、現
 在住んでいる居住者が、15年後にどの程度残っている
 のか気になる。また、今の段階ではマンション建替え
 の合意形成が進むとは到底思えない。

《過疎地の高齢者》

平成7年度のNIRAの調査研究で「高齢者はなぜふる
 さとを離れたのか」というテーマで調査をした。

この時にわかったことは、高齢者は夫婦のうちは何
 とか田舎でも頑張れるが、ひとりになった途端に都会
 の親族から都会の方へ呼ばれて行ったりしている。し
 かし、都会暮らしになじめない高齢者がまた田舎に舞
 い戻ってくるケースも多いということであった。都市
 部に比べて絶対数は少ないものの、その地域にとつて
 は比重の大きい問題である。今後とも増えていく過疎
 地の単身高齢者の終の住処はどこなのであろうか。

できれば自分の家でなくても、故郷で住めるよう
 になればと思うのであるが。

《高齢者住宅と3~4人世帯住宅との規模のミスマッチ》

全国の世帯人数と持家住宅の規模との関係を見ると、
 65歳以上の単身及び夫婦世帯の持家住宅の45%は100
 ㎡以上(154万世帯)の住宅に居住しているのに対して、
 4人世帯の持家では45%は100㎡未満(256万世帯)の
 住宅に居住している。つまり、高齢者は広い住宅に少
 ない人数で、若い世帯は狭い住宅にファミリーで住ん
 でいるという、規模の面からみた居住のミスマッチが
 ある。この高齢単身者や夫婦高齢者が居なくなった広
 い住宅は、どうなるのであろうか。

《既成市街地の高齢者》

全国の市部と郡部の高齢者の比率は72:28(13,079
 千人:5,181千人)となっており、圧倒的に都市部の方
 に多くの高齢者が住んでいる。特に既成市街地の古い
 住宅に住んでいる高齢者は、地震や火災に対する安全
 性などの面をみると建替えや住替えといった何らかの
 対策を考えていく必要のある層である。また、市街地
 に居住する高齢者は賃貸住宅に住んでいる割合も高い

ため、建替や地上げなどによって退居させられるケースも多いと聞く。

●今、居住面では福祉部局と住宅部局との垣根は見えなくなっている

「高齢者を集めて住ませる」ということで福祉サイド、住宅サイドでいろいろな制度ができています。これらをまとめたのが図1である。

住宅サイドでは高齢者向け優良賃貸住宅制度（以下高優賃）ができた。これはバリアフリーの住宅に緊急通報装置の付いたものである。食事などの生活サービスや福祉サービスを導入するかどうかはオプションになる。事業者は民間の地主や公団・公社などである。入居者には所得制限（収入分位0～25%以下、知事の裁量で40%まで）がある。

福祉サイドではケアハウスがあり、食事サービス等が付いている以外は高優賃とあまり変わらない。但し、特別養護老人ホームとの併設型ではケアサービスまでついているところもある。ケアハウスには所得制限はなく、60歳以上で身体状況が適合すれば誰でも入居できる。ただし、事務費負担が所得の段階別に分けられており、当社の試算によると年収約250万円を境に、これより下の層はケアハウスの方が毎月の費用負担が安くなるようだ。実際に福岡県のケアハウスの入居者層をみると、75%の方が年収200万円以下であり、ケアハウスは比較的所得者向けの住まいといえよう。

また、これまで過疎地にのみ供給されていた「高齢者生活福祉センター」がある。この施設はデイサービスセンターに居住部門を併設させたものであり、食事

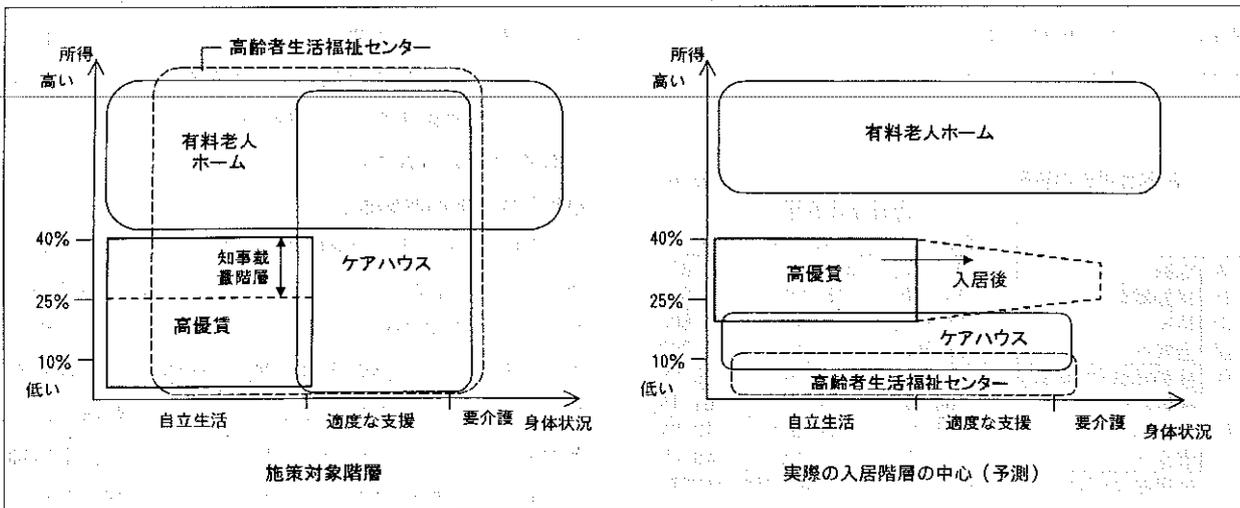
サービスも付けられるようになることからケアハウスと大差がない。また、居住部門の利用者負担額がケアハウスより低く設定されており、低所得の高齢者にはより入居しやすい施設となる。この高齢者生活福祉センターが来年度から地域制限の枠がはずされ、都市部でも設置可能となる予定であり、高齢者の集住スタイルの居住施設は、さらに多様なメニューが揃うようになる。

●高齢者住宅には多様なケアサービスが求められる

福岡市博多区K病院が母体となっているケアハウスの視察にいった。これまで見てきた特老との併設型が福祉施設の様な雰囲気であったのに比べて、このケアハウスは単独型であり、まさにマンションといった感じであった。

今、この施設の入居者は135名（61～94歳までおり、平均年齢は77歳）である。生活介助が必要になれば本人希望によりヘルパーを呼ぶことは可能であるが、食堂での配膳が自分でできなくなるほど健康状態が悪くなれば退所を促すとのこと。また、ケアハウスの入居基準は自立が基本であるので、要介護高齢者まで面倒が見られる体制ではないこと、また、要介護者が多くなると施設のイメージが低下し、入居者のプライド等もあることから、要介護者への退所には迅速に対応している。国の基準では自炊ができない程度の人が入居対象とされており、自炊はできないが自立している人しか入れないということになっている。実際には元気な人がほとんどである。高齢者の身体レベルの低下や人間関係のトラブルなどにより、年間に退所する高齢

図1 高齢者住宅と対象階層、身体状況との関係のイメージ



者は1割程度になる。

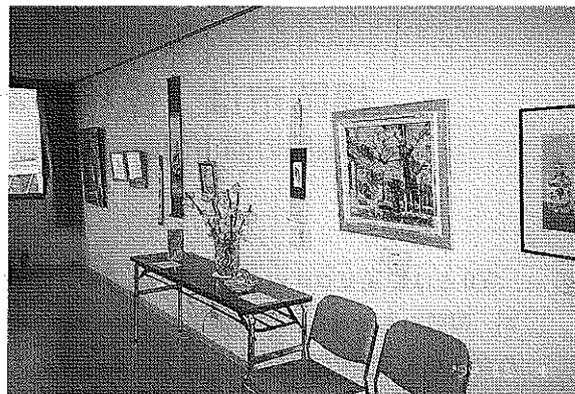
また、ここでは買い物や町中へ用事のために1日4回定期バスを出している。これ以外にも入居者から「風呂の見守り」「買い物の代行」「病院への付き添い」など1日に3~4件の手伝いの要望があるが、これらは有料である。

当ケアハウスでは食事係を除いて5名（事務員3名、生活指導員2名）で対応している。このように「高齢者を集めて住ませる」ということは、日常あるいは緊急の場合も含めて、いろいろなケアサービスの要望が出てくることになり、これにどれだけ対応できるかが施設づくりの鍵になると考えられる。

●持家高齢者を高齢者住宅へ住ませる多様な仕組みづくりが必要

先ほどのケアハウス視察で案内して下さった事務員の方へ「入居する人たちは、元の家をどうしているのですか」と聞いてみると、持家からの移動では半分の方は処分するとのこと。また、空家にしたまま来ている人もいるらしい。

一方、現在、高優賃事業化の申し込みは医療法人からが多いと聞く。これはケアハウスの補助対象にできる場所は社会福祉法人と自治体だけで医療法人などは入っていないことと、病院側が高齢者を集めることにより、将来的には医療から介護まで面倒をみるメリットがあることがあげられる。しかしながら事業主が医療法人のみであると、将来的に高優賃事業の普及が限定される心配がある。そこで、高優賃事業を一般の地主が事業化への意向を持つためには、さらに需要を創りだしリスクを減らす仕組みづくりがいる。そのため例えば図に示すように広い持家に居住している単身あるいは夫婦高齢者が自宅をファミリー世帯に賃貸化し、その家賃で高優賃に入居できるような中古スト



入居者の作品が飾られている展示室
地域に開放すれば多世代の交流ができるのではないかと

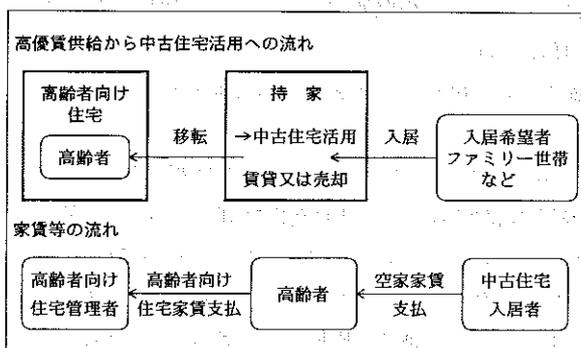
ック活用の仕組みができれば、一般の不動産業者も事業への参入メリットがでてくるのではないかとと思う。

●有料老人ホームから普通の多世代型マンションへ
ケアハウスと併せて、同じ法人が経営している有料老人ホームを見学させていただいた。その有料老人ホームは昭和58年に第1号館、平成7年に2号館を建設し、合わせて236室を有する施設である。主な施設の概要は下記のようになっているのであるが、2号館は施設のレベルも高く、映写室、音楽室、多目的室、浴室など充実した共用施設を有している。

しかし、それを見て感じたのは、老人ホームをひとつのまちとらえた場合、やはり偏った階層が入居しており“普通のまち”ではない。もっと気軽に若い人も行き来できるような施設にならないだろうか。具体的には、ファミリー世帯向けのマンションを隣接させるか、あるいは廊下でつながなどして、食堂やいろいろな共用施設をお互いに利用する。それによって施設の稼働率も高めることができ、施設全体の雰囲気も良くなる。サークル活動なども高齢者だけでなく若い人も入れればなお良いのではないだろうか。

いずれにしても、これから単身高齢者や夫婦高齢者の増加に伴い、「高齢者を集めて住ませる」といった形態は増えてくるであろう。その際、どれだけ高齢者にとって魅力があるか、自分が元気なうちから入ろうと思えるかが入居者を集めるポイントになると思われる。（やまだたつお・いとうさとし）

図2 高優賃と持家賃貸化との関係づくり



福岡市は“風格のある都市”へ歩むべきだ

—福岡の都市問題の視点はY0時代の遺伝子の再発見から—

糸乗 貞喜

Y0とは紀元ゼロ年のことを言う。Y2K（2000年）などといわれているので、ついY0などと書いたが、福岡のもととなる伊都国（いとくに）、奴国（なのくに）が、かなりの程度に都市の様相を持ち始めたのがYゼロの頃だと見られている。つまり、その頃に、大陸と倭（やまと）を結ぶ国際的な知的交流センターとなっていたことが、魏志東夷伝倭人の項や、当地で発見されているおびたしい銅鏡などからうかがえる（これについては聞きかじり程度の知識しかないが）。私は、福岡とのつきあいは15年しかないのに、他所者の見物人ぐらいだが、この都市の現在と未来について感想を書いてみたい。見当はずれも多いと思うが、エッセイとして見ていただきたい。

●モノへの欲望とコトへの欲望、やたらに皿数の多い観光旅館や料理屋（ゴチソウヤ）がウケるわけ

2、3年前に豆腐をベースにした料理で、御婦人方にウケて大流行（おおはやり）している店に誘われたことがある。豆腐は大好きなので喜んで誘いを受けた。その店の特色は、たくさんの皿数で、少しずつついでであるが、豆腐の品質がもうひとつで、少し小さすぎた。つまり、豆腐はあまり自己主張する食物でない。ということは、それをベースとするかぎり少し大きめの量で味わってもらうことが必要となる。

残念ながらその店は豆腐の位置づけが弱すぎたので、私には少し不満が残った。今年の夏、東京で食事に誘われて同じ店の東京店（チェーン店が東京にまで進出しているのである）に行った。「あまり好きではない」と思いながらついていったのだが、かなり良い店になっていた。

他愛ないことを述べているが、私はこの小文を都市論のつもりで書いている。「質の時代」の都市づくりは、量で目立たせるようなことではなくサービスの質が大切になるので、かなり難しい。

豆腐という食品は、「あまり自己主張はしなくて、あらゆる食材との取り合わせ・協同の妙がある」ということで、都市論に置き換えるとなかなか魅力的な味わいがある。

モノとコトについての欲望ということで述べると、「人間の欲望は限りがない」などと言われているが、モノに対する欲望は多寡が知れている。食欲にしても性欲にしても、体力がともなう欲望は一瞬に大量充足す

ることはできない。中国の王侯は、一旦食べたものを吐き出しながら食べたと言われているが、これも限界があり大したことはない。

しかし、コト（遊び、イメージ、妄想も含む）に対する欲望が限りがないように見える。この方は供給が増えれば増えるほど、欲望も増大する。人間の知的好奇心は、刺激されるほど膨らみ続けるのである。人間という動物は、知的好奇心を伴った動物であるので、「欲望に限りがない」と言われることになったと思われる。

始めの話に戻ると、中高年の女性が元気な社会になってきて、そのグループの食事や旅行が増えてきている。「あれも喰いたい、これも喰いたい」が、量は受け付けられない注文をもったグループなので、「やたら皿数が多い」ことになりやすいが、そこにはそれなりの自己主張を持ったベースとなるモノが必要である。

都市のスタートは、「市」というモノの交換の場としてであったが、情報交換の場（コトに対する欲望を充たすことも情報交換である）となることによって「都市になった」と考えられる。その都市が、質の時代を迎えている。その問題提起を「豆腐・欲望・都市」の3題話で行ってみた。

●今後は“風格のある都市”が人気を集め、アクティビティが都市をつくる

『遁げろ家康』という歴史小説が話題になっている。（著者は池宮彰一郎、朝日新聞社刊）。この本を読んでふたつのことを感じた。ひとつは、信長の死によって、家康の「信長について行って、その元で大大名となろう」という人生設計が崩壊したと述べられていること。

もうひとつは、信長・秀吉が商工をベースとした展開型のプランナーであったのに対して、家康は農業経済に基づいた収斂型の方針を実行したことである。

まず前者についてみると、この本の中にエピソードが綴られている。本能寺の変を知った家康は「死ぬ」と言ったそうである。記録としては「恥をとらんよりは、いそぎ都にのぼりて、知恩院に入り、腹切って織田殿と死を共にせん、とのたまう」となっている。著者は、家康の「徳川家を天下屈指の大大名にしよう」という人生設計が夢物語と化し、今後は自分の考えで乗り切っていかなばならなくなったことに対する、不安だと見ている。先導者がいる同盟者は、少々つらい道でも、努力さえすればよいのであるから比較的気楽だとも言える。しかし、一寸先は闇という世界での先導者にはどんな危険が待っているか分からない。信長はその道を歩んだがゆえに49歳の人生で夭折したのである。家康はその危険を目のあたりにしたがゆえに、怖じ恐れたのであろう。

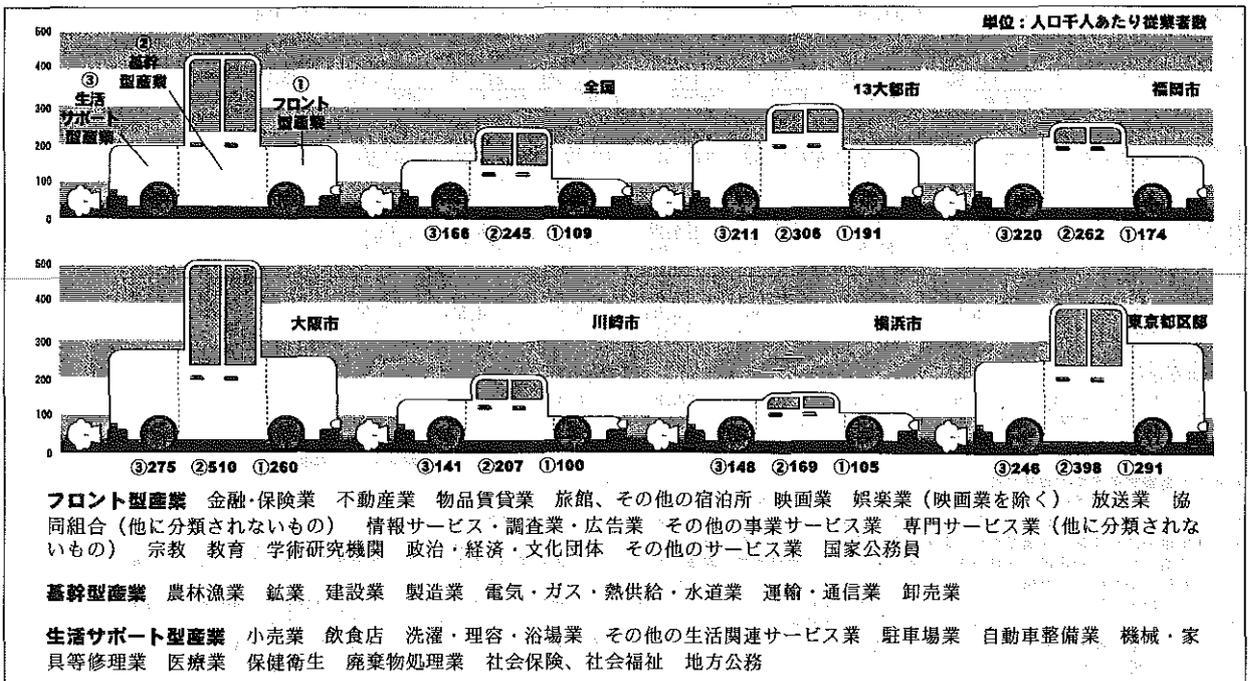
この本を読んだ時は、「量的拡大は終わったあとの福岡という都市の方向付け」について考えていたので、家康の話と重なって、妙に気になった。

2番目の話は、上記の話に触発されて出てきた、全く私の個人的感想である。家康は、商工をベースとした信長・秀吉の展開型のプランを捨てて、農業中心の封セダン型産業モデル

建領主による治世へ逆戻りさせた。日本の60余州を300諸侯で治めさせることとなったが、その藩や地域には3つのタイプがあるように思う。以下に並べて考えてみると、④始終移封のあった藩、⑥主として外様の大藩に多いが、定着度の高い藩、⑦幕府の代官によって治められた直轄地である。

藩の中核は都市になっているが、④の都市は都市政策が定着しなかった所以か、特色に乏しい、⑥の都市群は治世者と住民が一体となった（つまり官民一体の）殖産興業政策をもっていたので、今にその特色を伝える例が多い、⑦の地域は比較的ゆとりのある統治が行われたので、民が元気を出して特色が形成されたが、⑧の藩のように大都市にまではいっていないように思う。私どもの先輩である米田さんがまとめられた「都市の風格について」というレポートに取りあげられていたのも⑧のグループであった。

風格というものは、ハードとしての構造物も必要であるが、その都市の土地柄が人柄を通して伝わることによって醸し出されるものだと思う。ということは、ハード自体も単に量的に大きいだけでなく、それが土地柄という文化を表現しているものでなくてはならない。したがって都市という場・劇場は、土地の人たちのアクティビティを引き出し、人柄の表現をしやすくすることが望ましいように思う。自分でもよく分か



っている訳ではないが何となくそう思っている。

福岡が今後持つべき“風格”とは何だろうか。分からないながら今後考えてみたいと思う。

●セダン型産業モデルで都市の性格を比較してみる

私は、地域の性格を産業構造・就業者の数や比率でみることにしている。その方法は人口1,000人当たりの就業者数と就業構造を3分類に分けることである。第1グループは、地域の産業雇用をリードする就業者群で「フロント型産業」という。第2グループは現在の地域の稼ぎを生み出す就業者群で「基幹型産業」と呼ぶ。第3グループは「生活サポート型産業」といって、地域の暮らしを支える仕事を指すことにした。(図1)

この産業分類によればまず①人口に対して働く人が多い地域は豊かになりやすく、②フロント型産業の構成比(1,000人当たり人数)が高い都市は次の時代の仕事が準備されやすく、③基幹型産業が多いと現在の稼ぎが多くなり、④サポート型に働く人が多いまたは暮

らしに対する面倒見が良いことになる。不思議なことというか、当たり前のことというか、第3グループのサポート型への就業者は地域格差が少ない。

福岡市と他都市を内容に立ち入って考えてみる。

1,000人当たり就業者数(稼ぐ人の多寡)では、大阪市、東京都区部、名古屋市に次いで多いし、全国全地域平均よりは高くなっている。このことは、就業地型の都市(周辺から通勤してくる)だということを示している。それに対して、横浜市、川崎市などは全国平均(田舎を含む)より少なく、通勤するための居住地型の性格を示している。このことを別の面からみると、大阪市や東京都区部は夜間人口と同数の就業者がおり、行政上の市域の2倍の都市圏を持っていることが分かる。福岡市の集中率は全国平均の1.3倍ぐらいであり、常々いわれている都市圏人口200万人(行政上の人口130万人)が、ほぼ妥当だといえるようだ。フロント型産業は東京都区部が全国平均の3倍に近く、ついで大

産業(中分類)別従業者数(平成8年)

	全国	13大都市	札幌市	仙台市	千葉市	東京都区部	川崎市	横浜市
人口	125,570,246	27,118,270	1,757,025	971,297	856,878	7,967,614	1,202,820	3,307,136
面積	377,829.41	6,641.98	1,121.12	783.50	272.08	621.00	142.40	435.89
全産業(平成8年)	62,781,253	19,204,595	936,234	564,054	409,687	7,446,080	539,713	1,397,961
人口千人当り	499.97	708.18	532.85	580.72	478.12	934.54	448.71	422.71
フロント型産業	13,656,693	5,178,492	257,572	148,057	112,520	2,320,254	120,046	348,418
人口千人当り	108.76	190.96	146.60	152.43	131.31	291.21	99.80	105.35
専門サービス	1,805,101	746,766	35,700	22,242	12,379	314,047	15,528	52,785
人口千人当り	14.38	27.54	20.32	22.90	14.45	39.42	12.91	15.96
情報サービス	807,107	565,548	16,879	10,630	11,496	301,535	21,922	41,976
人口千人当り	6.43	20.85	9.61	10.94	13.42	37.85	18.23	12.69
学術研究機関	264,674	78,733	3,329	2,541	3,081	30,997	9,347	13,405
人口千人当り	2.11	2.90	1.89	2.62	3.60	3.89	7.77	4.05
基幹型産業	30,772,187	8,300,917	345,319	234,783	150,263	3,167,879	249,544	559,134
人口千人当り	245.06	306.10	196.54	241.72	175.36	397.59	207.47	169.07
生活サポート型産業	20,797,896	5,725,186	333,343	181,214	146,904	1,957,947	170,123	490,409
人口千人当り	165.63	211.12	189.72	186.57	171.44	245.74	141.44	148.29
	名古屋市	京都市	大阪市	神戸市	広島市	北九州市	福岡市	
人口	2,152,184	1,463,822	2,602,421	1,423,792	1,108,888	1,019,598	1,284,795	
面積	326.37	610.21	220.66	547.28	740.93	482.95	337.59	
全産業(平成8年)	1,581,493	821,611	2,719,446	793,316	637,225	515,466	842,309	
人口千人当り	734.83	561.28	1,044.97	557.19	574.65	505.56	655.60	
フロント型産業	357,044	182,569	676,751	177,949	150,074	104,054	223,184	
人口千人当り	165.99	124.72	260.05	124.98	135.34	102.05	173.71	
専門サービス	59,864	22,976	112,040	25,989	25,140	13,733	34,343	
人口千人当り	27.82	15.70	43.05	18.25	22.67	13.47	26.73	
情報サービス	32,963	6,791	78,003	8,612	9,844	4,905	19,992	
人口千人当り	15.32	4.64	29.97	6.05	8.88	4.81	15.56	
学術研究機関	2,113	2,718	5,591	3,470	799	541	801	
人口千人当り	0.98	1.86	2.15	2.44	0.72	0.53	0.62	
基幹型産業	757,360	332,604	1,328,272	340,163	275,551	223,527	336,518	
人口千人当り	351.90	227.22	510.40	238.91	248.49	219.23	261.92	
生活サポート型産業	467,089	306,438	714,423	275,204	211,600	187,885	282,607	
人口千人当り	217.03	209.34	274.52	193.29	190.82	184.27	219.96	

資料：事業所統計調査報告、国勢調査

※セダン型産業モデルの産業分類について

注1：データで事業所統計と国勢調査からとしたのは、国勢調査のみでは中分類のデータが揃わないためである。
 注2：第2部門の「A～C農林漁業」は「従業地における農業、林業、漁業就業者」(H7年国勢調査)の数値を用いている。これには「主に仕事」「家事のほか仕事」「通学のかたわら仕事」「休業者」が含まれている。「主に仕事」のみ取り出すならば70.8%(全国)となる。また、「主に仕事」のうち70歳以上が19.1%となる。したがって農林漁業の就業者数のうち「70歳未満の主に仕事」は57%程度となる。判断の上では、農林漁業全体が少ないので問題になるほどではないが、このことを含んで全体の数値を見ていただきたい。
 注3：その他の気になることを挙げておくと、「教育」のうちフロントらしい「高等教育機関」「専修学校・各種学校」「博物館・美術館」の従業者は23.1%である。とすればそれ以外は「生活サポート型産業」ということになるが、生活サポートに該当する部分は人口に比例していると考えられるので、少しでも地域の違いが出る方が良く考えて「フロント型」に入れた。「金融保険業」も生活サポートの側面が強いともいえるが、教育と同じような意味で「フロント型」に入れている。また、「物品賃貸業」も「基幹型」と「生活サポート型」にはほぼ2分されるが、新しい産業でもあり、ベンチャービジネスの支えにもなりやすい業種であるので「フロント型」に入れている。

阪、福岡となっている。「単に産業分類での比較では、重要度が示されない。同じ金融・保険業でも本社の就業者と支店では違ふし、中枢機能で働く人と新入社員では違ふのに、この統計では同じウエイトになっている」などという批判はあると思うが、この分類ではウエイト付けはできていない（使用するデータからして無理）。もしそういうことが気になるなら、また別の視点で都市構造分別をしなければならない。

福岡市はフロント型については充実した就業の場を持っているが、「学術研究機関」に働く人の数は全国平均の3分の1弱、13大都市の5分の1強である。総じて中枢機能は強いが、宗教とか学術などの抽象的な職業の就業者は少ないと見られる。支店経済といわれる福岡市は、あらゆるフロント部分についても九州の中核となっており、支店が揃っていると考えられるが、宗教や学術機関は支店がないということかもしれない。

●天神は南へ西へ。その後の空洞化対策は

都市の魅力は、言い換えれば都心の魅力である。

天神の岩田屋前は九州で一番地価の高いところであるが、その岩田屋が空家になりつつある。'99年の8月に岩田屋本館と隣接する新館が学校法人都築学園に売却されることになった。12月には「新館リビング閉店セール」が始まった。岩田屋閉店の発表前の7月に、最も老舗の福岡玉屋が廃業した。

1997年に岩田屋、大丸、三越が増床・新設して天神地区の百貨店面積が、一時に2.7倍になり、「福岡はなぜ元気なんだ」と全国的に注目されてきた。その上に今年下川端再開発事業でスーパーブランドシティなどがオープンした。しかしこの方も売り上げ目標には程遠いと新聞に報道されている。

今後の地価の最高地点は、大丸や三越の方へ移りつつあり、従来東西間が遮断されていたのが、西鉄の高架によって西側への発展の流れが起こっている。

都市の魅力は結局「都心の魅力」だと述べたが、その都心の魅力は単にモノの流通の場としてではなく、「知的好奇心を醸成させる醸造所」である。今までの福岡市は流通に片寄った大都市であったかもしれない。今後は人が多く集まることによって、一層混沌とした場となり、「あやしき」や「いかわしき」を含めた知的猥雑さが強まるようにならねばならないだろう。

九州の中で熊本と福岡が競いながら、結局福岡が大きくなった理由として、師団（軍隊）より九大（大学）

の方が都市建設に寄与したからだという説明を聞いたことがある。しかし九大は、本学が航空機の爆音の下にあり、その上、分散立地となっていた。九大は今、西部への移転に取り組んでいるが、総合大学には2つの側面がある。ひとつは理工系を中心とする装置インフラであり、もうひとつは理工から文系までを含む知的交流インフラの側面である。前者は広い土地が使える郊外型である。後者は一層都心化する必要がある。

数年前までは、大学の郊外移転による大キャンパス化が大勢のように見られていたが、今やその欠陥に気づいて、都心回帰が起こってきている。その走りとなったのは霞ヶ関ビルの「東海大学会館」であるが、この会館は1968年の霞ヶ関ビル建設時から設けられている。これは、東海大学の平塚への展開に対して、都心重視の思惑などから設置されたと言われている。

公立大学である大阪市立大学でも、大阪市内の端に立地している不便さをカバーするため、大阪駅前の再開発ビルに、同窓会の募金によって「大阪市立大学会館」を設けた。近年のことではあるが、吹田市に移転した大阪大学が、大阪都心の桜橋にある近鉄ビルに「阪大会館」を設けている。阪大はそれだけではなく、医学部跡に「平成の適塾」として「大阪大学中之島センター」を設ける準備をしている。

東京方面でもこのような動きは、枚挙にいとまがない。慶応や早稲田が赤坂のアークヒルズで社会人大学院を開いたり、立命館が大阪淀屋橋に会館をつくりと、動きが急になっている。

九州では県庁などの行政機関が、福岡へ事務所を設ける動きがひとわり起こって一段落した。しかし本来の目的が知的交流である大学の方が、必要性としては大きいはずである。九州の各大学の共同利用センターのような機能が天神都心に立地すると、一層知的交流が促進され、大学にとっても、天神都心にとっても望ましいことになる。

九大の都心=天神立地は、九大を、移転によってワンランクアップさせるためには不可欠のことであろう。久留米大学が天神にサテライトを設ける動きがあるが、九大をはじめとした九州の各大学の交流センターが、空洞化する天神を埋め、一層本来の知的都心性を高めることを期待したい。福岡市も、九州をリードする都市像を描くためにも、このような展望に基づく都市充実政策を行うべきであろう。

● Y0（ゼロ）の遺伝子と呼び起こす

今から2000年ほど前までには、末盧国、伊都国、奴国と連なった北部九州地域は、単に魏志倭人伝の頃だけでなく、それ以前から都市の様相を示していたことが遺跡などから見てもうかがわれる。

その頃の遺伝子は、今どこに行っているのかが気になっている。

昨年四月に、九州大学の糸島移転計画を手伝うように言われて、すぐに気になったことが、福岡という都市の将来像であった。それ以来、はるか以前に築かれた「水城」、伊都国の「怡土城」とそれにかかわる土塁、前原市にある「平原遺跡」などの出土品の数々（膨大な数の銅鏡が「伊都歴史資料館」にある）、その西の末羅（松浦）の国、壱岐の「原の辻遺跡」などが浮かんだ。水城が怡土城にもあるように、伊都国や奴国は、おそらく常日頃から連携されていたに違いない。

その頃の人々は、どのような知的交流を行っていたのだろうか。稲作が、もし順次に西から東北に伝わったとしたら、そしてその期間が今発見されている遺跡のおよりの200年程度だったら、一作付けごとの伝搬スピードは10キロぐらいになる。すべてが、駅伝競走のようにタスキが繋がるわけではない。とすれば、知的交流密度は相当なものだったと推察される。

今後の都市建設にとって、大学の占める位置は一層大きくなるに違いない。福岡市が知的インフラをそなえた都市として大をなすには、九州大学のはたす役割も、小さくはないと思う。福岡、糸島、九大などの中にYゼロの遺伝子がどう含まれているのだろうか。

（いとりのり さだよし）

町並み保存には賑わいづくりが欠かせない

～白壁の町、吉井を通して～

山田 龍雄 小田 好一

町並み保存といっても保存のための保存で終わってしまえば、それは単に博物館としての役割しかなく、全く寂しい町となり結局は人々の記憶から消えてしまう運命となるのではないだろうか。町が町として有り続けるためには、そこに住んでいる人の暮らしがあり、営みのある町となっていなければ、魅力のないものになり、地域全体としても魅力のないものになってしまうのではないだろうか。そのような感慨を抱いていた時に、

福岡県南部にある吉井町の白壁のまちづくりの取り組みが、町並み保存と賑わいづくりのヒントにつながるのではないかと思います。当時、吉井のにぎわいづくりに係わった関係者の話をうかがった。

●白壁の町並みのなりたちと現状

かつて久留米藩の宿場町であった吉井は、木蠟、酒、醤油などの生産地、筑後川を利用した物資の集散地として栄え、近世後半には「吉井銀（がね）」と呼ばれる金融資本が集積した。近世以来形成されてきた町並みは幾度か大火に見舞われたが「いぐら屋」と呼ばれる重厚な造りの町家が今も多く残されている。現在、吉井町では祭やイベントが目白押しである。後述する「小さな美術館めぐり」以外にも、各家に古くから伝わるおひな様を展示する「おひな様めぐり」や町並みの至る所でイベントが行われる「しらかべ楽市楽座」、骨董品の出店が並ぶ「お宝の市」など数多く開催されている。現在の観光客は年間約50万人、10年前と比較すると約2倍に増えている。

●町民の関心が薄かった白壁の町並み

白壁のまちづくりは吉井町観光協会会長である金子文夫氏が23年前（昭和52年、会長就任時）から「白壁の町並みを大切にすべき」ということを言い続けていたことに始まる。当時、多くの住民は白壁土蔵の町並みに関心がなく、中心商店街に立地する伝統家屋では大きな看板で2階部分を覆ってしまう看板建築が多く見られた。

やがて、金子氏が町並みの大切さを言い続けているのがきっかけで観光協会役員が昭和58年6月第6回全国町並みゼミ（※1）に参加した。この頃から徐々に白壁の町並みの良さが住民の意識に浸透し、昭和59年3月には吉井ルネッサンス、白壁保存と活性化を考える



吉井の町並み

会が発足する。同年9月には「吉井の町づくりシンポジウム」が開催される。

それまで民間主導で活動が行われていたが、平成3年斎田和弘町長による白壁土蔵の町並み保存のまちづくりが初めて行政サイドで動き始め、「白壁土蔵の町並み推進計画」が策定される。

●白壁の町並みを活かした小さな美術館めぐり

吉井町にもっと観光客が来てもらえないかということでイベントを仕掛けた方に取材することができた。その概要を以下に示す。

「白壁だけでは集客できない。なにかプラスアルファの要素が必要である。」「白壁の町並みをバックに美術館めぐりをとしてもらおうというのはどうか」という提案がきっかけで美術館めぐりの準備活動が始まった。

平成2年7月には吉井町ふるさと創生事業(※2)の募集が開始し、採用されれば助成金が付く。しかし残念ながら小さな美術館めぐりの企画は採用されなかった。それでも、メンバーの熱い思いによって美術館めぐりは断念されることなく、助成金なしで手弁当でやろうということになる。

小さな美術館めぐりの実行メンバーは画家、陶芸家、写真家、蔵の所有者、ギャラリーオーナーなどで地元出身者で構成されている。

当初、ガードマンを付けて吉井にゆかりのある坂本繁二郎の作品展示の案も出ていたが、十分な資金がなく自分たちの作品とコレクションを展示しようということになった。

結局、会費1万円、当初の会員数32名で合計32万円の資金からのスタートとなった。こうして、平成3年5月「第1回筑後吉井の小さな美術館めぐり」の開催に至った。

当日はテレビが各局取材に入り、ニュースなどで取りあげられ、町外の人が興味を持ってくれた。また、町外の人が興味を持って吉井の町並みを散策している様子を実際に見たり、テレビで放映されている様子を見て、町内の人の町並みに対する意識が変わってきた。また、美術館めぐりのパンフを観光客に対してでなく、町民全世帯に配布したことが町民の意識改革に役立っている。美術館めぐりの実行メンバーから町民に対して「なぜ、よその人が興味を持って来ているのかを見て欲しい」というメッセージが込められているようだ。

この取り組みは、町外の人だけでなく町内の人に対してもPRとなり、第1回では3日間で8,000人が来場した。現在の美術館めぐりの来場者は開催3日間で2万人、最近はやや減少傾向にあるが、制作者の方は「その分ゆっくり見ていただける」ということで心配はしていないようだ。こうして美術館のメンバーは町並みの付加価値を付けていった。

取材をさせていただいた実行メンバーの一人である山崎さんによると、ふるさと創生事業に採用されず、開催するための資金もままならない逆境の状態があったからこそ「こうなったら自分たちの方でやってやろう」という意識でメンバーが団結し、本気になって取り組み、結果的に大成功をおさめることができたということだった。現在、吉井町で開催されている数多くの祭やイベントはすべて住民主導で行われている。行政まかせになっていないことが吉井のにぎわいづくりの秘訣かもしれない。

●観光客向け店舗は、徐々に増えている

白壁の家屋が集積している一帯は、町の中心商店街であり、また、周辺の浮羽町や田主丸町を含めた広域的な商業地としての役割も担っていたところである。しかしながら、この町並み保存運動の取り組みが始まったことから周辺及び町内にスーパーマーケット(甘木のジャスコ、町内の寿屋、サニー、マルショク、タイホー)が建ち並び、中心商店街に大きな影響を与えている。その辺の状況を商業統計でみると、1人当たり売上高は昭和63年には県平均より3万円(吉井町:77.6万円/人、県平均:75.2万円/人)ほど上回っていたのであるが、平成10年では県平均より13万円(吉井:105.6万円/人、県平均:118.6万円/人)も下回っており、その町全体の商業地の吸引力が弱体化している

伝統家屋の活用例① 中を改築し、 食堂にしたお店

写真中央の引戸はシャッターの代用品になっている。引戸を閉じた状態が町並みの風致を守っているものであれば伝統の整備例として認められる。伝建指定されても、家屋内部は基本的に自由で、右側のログハウス風の壁は家屋内部と見なされ自由に改築できる。



ことがわかる。吉井町の場合には国道210号線沿いの中心商店街に町の大半の店舗が集積していることから商業統計の店舗数の推移は中心商店街のこととイメージされるものである。そこで、小売業全体で290件から246件と44件の店がなくなっており、さらに業種別にみても「飲食品」31件マイナス、「家具・建具」6件マイナス、「織物・衣服・身の回り品」4件マイナスと最寄品ならびに買廻り品とも減少している。しかしながら、町並み保存と賑わいづくりによる観光客の増加が、新たな業種を生み出しているようである。その内訳をみると中古品小売業が4件プラス、その他分類されない小売業（宝石小売、装身具小売、美術品小売、ペット小売など）6件プラスとなっており、中古品小売はすべて骨董屋さんであり、地元骨董屋さんの口利きで空き店舗や民家を借りて営業しているようだ。また、その他分類されない小売業の中身を聞いてみると、アクセサリーや民具店が何店ができていたとのことであり、これも観光効果といえよう。

ちなみに民家の家賃相場は6~10万円/月といわれており、日常的に集客力がないと営業が厳しい喫茶店や飲食関係の立地は今のところ厳しいようである。逆に客単価の良い骨董屋は土曜、日曜日の商売でも成り立つとのことである。我々が取材にいった日は金曜日にも係わらず、熟年女性のグループが2~3組来ており、土・日曜日以外のお客さんはどうもこの年代の人のようだ。

●権利者が「修復をしよう」と思うためには……

当重要伝統的建造物保存地区内で指定されている伝統的建造物（以下「伝建」という。）は154件である。これを年度毎に修復する訳であるが、国からの年間の配分が4~5件、平成7年度より実施してきた伝建の修

復件数は21件（町単費7件、補助分14件）であり、残りを順調に修復していったとしても30年近くを要する息の長い事業である。また、年々、伝建地区が増える中で、その配分件数も厳しくなってくることが考えられ、さらに完了時間は延長することになるかも知れない。

伝建指定されて修復工事を行う場合、国と県から80%の補助があるものの、残り20%は自己負担となる。したがって、町並み保存で難しいのは、町並みを残すことは町づくりの理念としては理解できても、権利者が町外に住んでいる場合や自己負担をするだけ資金的に余裕がない場合などの問題である

特に資金があっても町外に住んでおり、故郷に戻ってくる予定のない権利者にとっては修復工事をするだけの投資効果がないと負担をする気にならないことになる。そこで、修復工事への投資意欲を持たせるためには伝建を活用し、テナントとして商売したい、あるいは権利者の方自らが何か商売してみようといった町にしていかなければ、いくら伝建指定を受けた民家であっても朽ち果てたものになっていくのである。あるいは町が税金をつぎ込んで買い上げるしかないことになる。今は2件を町が買い上げて修復している。

取材させていただいた賑わいづくり仕掛け人のひとりである前出の山崎さんの次のようなお話は町並み保存運動の本質をついているように感じた。

「町並みといっても全国どこにでもあり、珍しいものでなくなった。『単に町並みがあります』といっても何も売り物にならない。売り物のある町並み、付加価値のある町並みにしないと人は振り向いてくれないのではないのでしょうか。吉井の場合は、当初から付加価値を付ける町並みというコンセプトで取り組んできました。また、経済効果を考えない町並み保存はダメではないのでしょうか。将来は、町内で獲れた新鮮な農産物や加工品を販売し、来た人を買ってもらうような取り組みもやっていると、もっと町並み保存と地域との結びつきが強くなり、経済効果として波及させることができる」

このようなことを考えた場合、世界レベル、全国レベルで歴史的価値のあるものを除いて、町並みを保存していくためには、地域の人々が町並みを活かしながら賑わいづくりを行い、経済効果を高めるような町としていくことが求められる。



伝統家屋の活用例②
吉井ではスナックもこのとおり伝統的なものに！
写真は伝統家屋でスナックを営んでいる例である。このような業種であるにもかかわらず、伝統様式に忠実に整備されている。所有者の町並みに対する関心の高さがうかがえる。

今、吉井では大型バスで訪れた観光客が一同に食事を
する場所がないこと、あるいは滞在時間を延ばし、宿
泊するお客さんが少ないことが悩みだそうで、今後、こ
れらの問題に対応しながら、益々観光地としても魅力
を高めていくであろうと期待される。

(やまだたつお・おだこういち)

※1 全国町並みゼミ：全国町並み保存連盟が主催するゼミで
今年で22回を迎える。古い町並みを活かしたまちづくり
活動に携わっている方々がお互いに情報交換する場でもあ
る。

※2 吉井町ふるさと創生事業：吉井町ふるさと創生基金(2
億円)を設置し、町民によるまちづくり、及び人材育成を
助長し、「自ら考え自ら行う地域づくり」事業を推進して
いる。

地域もどこと付き合うとプラスになるか 考える時代に3

～田舎で仮想里帰り体験を子供たちに

尾崎 正利

この2年程の間、長崎県の北松浦地域の仕事に携わっ
ているが、この地域で「なぎさの伝習所」という運動
をやっているということの前々から聞いていた。何で
も都会の子ども達を地域の民家にホームステイさせて
「なぎさ」を舞台に様々な遊び・体験をしてもらおう活動
を行っているという。

今秋、福岡市の博多市民センターの催しで、この伝
習所に関わった松原利孝さんのお話を聞くことができ
た。

大変楽しい話であったので、現地で雰囲気を感じな
がら再度、お話を聞いてみよう、11月21日に舞台で
ある長崎県鹿町町(しままちちょう)に出かけてみた。

●マネに始まり、ついに本家より盛んになった

現地で松原さんに直接会うことができた。松原さん
は学習塾を営む一方で、町会議員を務め、地域でパソ
コンクラブを開くなどの活動をしておられる。今年49歳
で、今年の「なぎさの伝習所」の実行委員長であった。
「なぎさの伝習所」は毎年夏7月最終週に行われ、都市
部(主に長崎市、佐世保市)と地元の子供をホームス
テイさせて鹿町町にちなんだ学びと遊びを体験してもら
うというものだ。鹿町町は佐世保市から車で約30分
のところにあって、かつての産炭地で昭和30年代に比

べ人口は減少しているものの、九十九島に面し、また
野鳥の生態観測などでも貴重なスポットとなっている
など、なぎさの魅力はいまだに光っている。

松原さんの話では、もともとのいきさつは大体次の
ようなものだ。

- ・最初は平成4年の5月、鹿町町在住の方が主催する劇
団が愛媛県の山奥に公演に行ったとき、「山の生活を
都会の子どもに伝える山の伝習所のようなことをや
ってはどうか」と言っているのを聞いてヒントを得
た。
- ・鹿町町に帰って、こちらの有志に話をすると「やろ
うやろう」となった。
- ・しかし国民宿舎以外に宿泊施設もなかったので、地
元の民家に子ども達をホームステイさせて、鹿町町
のなぎさをテーマにいろんな講座(地元ではワーク
ショップといわれる)をやってはどうかという運び
になった。
- ・もともと鹿町町では一度よそに出て再び戻ってきた
人が、パソコンやドライブ、自然と戯れるなどの遊
びのメンバーをいくつか作っており(松原さんも加
わっていた)、なぎさの伝習所の実行委員会がそれぞ
れのグループを結びつけて、一斉に取り組もうとい
う雰囲気づくりの核になった。ホームステイの受け
入れ家庭もこれらのメンバーが動いて開拓した。
- ・募集の時には県内の都市部の子供たち、それに地元
の鹿町町の子供たちが同数くらいで交わるようにし
た。第1回目の募集は100名で、子ども劇場の公演
などで声をかけて集まったのは55人。2回目以降は
リピーターと口コミで広がってどんどん参加が増え
た。

なぎさの伝習所の応募と参加者の推移

●募集対象

対象は小学校4年生～中学校3年生

●応募と参加

	募集	応募	参加(町内:町外)
第1回	100	55	55 (27:28)
第2回	80	136	118 (49:69)
第3回	100	160	147 (56:91)
第4回	170	190	177 (71:106)
第5回	120	153	136 (66:70)
第6回	120	125	120 (60:60)
第7回	120		128

※1)第4回、第5回は平戸でも2ワ-クショップ^oを開催。
第5回は生月町でもワ-クショップ^oを開催。

- ・講座数も最初の11から少しずつ入れ替えたりして増やし、もっとも多かったときに18も開いた。
- ・今ではキメ細かな対応と、充実した内容を目指すということで募集は120名前後、講座数も13くらいになっている。ついでながら言うと、本家の四国の山中の方は合宿型でスタートしたが鹿町町ほど地域全体での取り組みにはならなかったという。

●子ども達を送り出す親御さん達の手紙に心を打たれた

松原さんは第4～6回開催では実行委員会メンバーで、昨年、平成11年度開催の第7回目に実行委員長になった。実行委員のメンバーが強く惹かれるのは、お世話になるホームステイ先に子供たちを送り出す親御さんからよせられた手紙だという。中でも長崎市近郊に住む親御さんからよせられた手紙には「都会のベッドタウンに住んで故郷を与えられないことが子供に対する負い目になっていた。今回は参加させてあげたい」と書いてあったという。

一方で参加した子ども達の反応に、思わず感慨にふけることもあるという。

平成11年度 第7回のワークショップのメニュー

- | | |
|----|--|
| 1 | 海のくらしをしてみる 募集5名
(講師 青年漁業士 新立幸市さん) |
| 2 | 田舎のくらしをしてみる 募集5名
(味菜自然村代表 林三生・由美子夫妻) |
| 3 | なぎさの自然と遊ぶ 募集21名
(日本野鳥の会長崎県支部 鴨川誠さん) |
| 4 | 鹿町の自然を探検する 募集10名
(演出家 牧武志さん) |
| 5 | 鹿町の自然を撮る・うたをつくる 募集5名
(カメラマン 森山宏司さん) |
| 6 | 音をつくる 募集10名
(ミュージシャン 丸山祐一郎さん) |
| 7 | 身近な材料で手作りの遊び道具を作る 募集10名
(元中学校理科教師 熊谷厚生さん) |
| 8 | 大工さんの修行をしてみる 募集10名
(大工棟梁 小楠三郎さん) |
| 9 | 焼きものをつくる 募集12名
(陶芸家 奥村親・万知子夫妻) |
| 10 | 友禅和紙でリサイクル作品をつくる 募集8名
(和紙工芸士 横尾雅子さん) |
| 11 | お菓子を作る・パンを焼く 募集10名
(パン・菓子制作者 高橋純子さん) |
| 12 | リトルシェフになる 募集7名
(保母・栄養士 宮木朋子さん) |
| 13 | シー・カヤックにのる 募集15名
(鹿町海洋クラブ会員 執行輝次さん) |

ホームステイ先で夜に眠れなかったという子どもがいて、どうしたか聞くと「夜、雨が屋根を叩く音をはじめて聞いて興奮した」という。都会の家はマンションで、旅行もホテルなどで結局、平屋建ての民家に泊るという機会さえ珍しくなっているのか。

平成8年には過去最高の177人の参加があったが、鹿町町で受け入れ数が足りず、平戸市や江迎町などでも臨時開催して受け入れた。このときあるグループはホームステイでなく公民館に集団で宿泊した。しかし、その翌朝みると夜けんかしたような、顔にアザを作っている子どももいた。一方、ホームステイした子どもの間ではそうしたトラブルもほとんどないという。

こうした、都会の子どもが日ごろ溜めている緊張感を解きほぐそうと、講座ではかなり自由な時間を遣わせている。「今の子ども達は常に成果を求められる。だからここでは時間と空間を贅沢に使って遊んでいくことを進める」と松原さんはいう。

松原さん自身も日本画の講座をこの数年持っているが、こうした大人たちの思いやりとはうらはらに、夏休みの宿題の自由題材を「なぎさの伝習所」に行き手っ取り早く片づけようと意気込んでくる子ども中にはいるらしい。

●成果を求めない学習もあっていいはず

なぎさの伝習所の日程は概ね次のようになっている。

初日：説明会と交流会ですごす

2～4日目：講座の活動、4日目は合宿交流

5日目：報告会と分かれの集い

しかし、大体2日目の午前中までは海水浴をしながら自然に触れてのんびりすることを主眼にしている。そして午後にはボチボチはじめるか、というふうになるらしい。ちなみに先ほどの「日本画の宿題少年達」は松原さんが顔料の溶きかたから行うので、宿題の目算がもろくも外れて嘆いていたようだが、すぐに宿題を忘れて作業に夢中になっていく。「しかし、敵はさるもの」(松原さん談) さっちり4日目には猛烈なスパートをかけて日本画の宿題をこなして帰っていくそうだ。

2日目あたりから、実行委員会による壁新聞「デイリーなぎさ」が張り出され、各ホームステイ先の里親たちも預かっている子どもの様子を知ることができ、子供たちも他の講座の進捗が分かるようだ。このころから各講座、ホームステイ先では子供たちが主役になる。ホームステイ先で鶏の世話をしていると、手のひら

の上に卵を産んでくれた。いとおいしい気持ちでした。
・海のくらし（講座の名前）でクロを9匹釣った。そのあとでかいシイラを釣った。

といった感想が後々の寄せ書きに集められている。

成果を求めすぎないことが、結果的に子ども達が持つ純粋な気持ちを引き出しているようだ。

●子供1人のサポートに大人2人が関わる

100人以上の子どもに向き合って何かをつかんでもらうには、密度の濃いスキンシップが必要になる。ホームステイや講座の講師、アシスタントなど表に見える形のスタッフはもちろん、開催の準備にはじまり開催期間中の新聞作成、さらには事故防止のための補助など人手がかかる。

大体、子ども1人に大人2人という受け入れの手間がかかるそうだ。予算的にはかなり厳しいという。ちなみに平成11年度は7月27～31日まで開催し、準備期間の事業もあわせると計380万円の経費で、165万円は町の助成金、あとの200万円強は参加者からの参加費（1人当たり2.5万円）と民間企業からの助成でまかなっている。

一度きりのイベントでなく鹿町町に根付かせて続けていくため、松原さんたちは「なぎさの伝習所」の実行に関わるコスト計算のパソコンソフトを作っている。

そこまでして都会の子どもを受け入れて世話をする意味は、松原さんの言葉を借りるならば、1つは鹿町町を知ってもらうこと、2つ目は都会の子どもが鹿町町の自然に驚嘆して一緒に交わるのを通じて、地元の子供たちが、地域のことについて会話をするようになったこと、3つ目は受け入れの大人がそのままの地域で十分に人に喜んでもらえるという自信を持ったこと、などに収束されるだろう。

これまで歴代の実行委員長は、最初の1、2年目が先の劇団の方、3、4年目が地元のお寺のお坊さん、5、6年目がお店の店主、7年目が松原さんである。つまり地元で根付いた仕事をやっている人でないとつとまらない。実は一昨年（10月）の段階では「もうやめようか」という一歩手前までできていた。関わる人の気持ちに、慣れ、気のゆるみが見え隠れしていたようだ。「そんな気分でも子どもに怪我をさせてはいけない」、という意見が出された。いよいよ、やめるための決を採るため実行委員会のメンバーが集まり30分ほど話をして解散となったが、そこに居る皆が誰も帰りがらなかったとい

う。誰かが一言「やはり続けたい」というと皆で気を引き締めてがんばろうということになった。

●地域の人を総動員しておもてなし

この伝習所が土地に根差していて、手作りという印象を与えるのが講師陣だ。鹿町町に関わりのある方、北松浦地域に根差した文化活動を行う人、町内の誰かの知り合いなど、地域のネットワークそのものである。

最近では女の子が大工さんや漁師さんの講座を希望したり、男の子が料理講座に行くなどして、教える方にとってもいろんな意味での刺激があるらしい。

また、伝習所の活動をささえるボランティアの存在も大きい。最近は何となく手伝って何年か経つうちに鹿町町に知り合いができて、ついに住み着く若者まででてきた。私たちが鹿町町に松原さんをたずねたとき「農業をはじめて9日目です」という方もいた。

近年「自然誌博物館」ということを地域活性化のキーワードとして使うところもみられるようになったが、「なぎさの伝習所」をみていると、地元の資源や魅力をよく知っている人が参加することがまず不可欠の条件で、その次に同時に財源や人手の応援などの実務をこなすコアメンバーの存在がやはり重要なようである。

（おさき まさとし）

農業も地域も、“かあちゃん”が支えて “とおちゃん”が応援

澤谷真紀子

現在、佐賀県上場（うわば）地域の農業活性化の仕事をお手伝いさせていただき、地元の元気な方々のお話を聞いて回っています。

上場地域とは、北松浦半島の比較的標高が高い地域「上の方の地域」で、下の方の地域「下場地域」もあります。上場地域には、呼子町、鎮西町、玄海町、肥前町、唐津市（一部地域）、北波多村（一部地域）が含まれます。

この地域は30年ほど前までは水が無く、主要な作物といえば、甘藷、馬鈴薯など水が無くても比較的大丈夫な作物と、棚田米、畜産でした。しかし、昭和48年に国営の大規模ほ場整備が行われ、水の確保が可能になったため、現在では上場米、施設園芸（イチゴ、ハウスミカン等）を始め、たばこ、甘夏、葉野菜、イモなど多種多様な農産物の栽培が行われています。

●「集落を元気に」の思いで住民が作った愛郷ファーム

九州で佐賀牛というと、「高い」という印象が大半だと思えます。実際、市場での評価が高く、取引価格も高いです。しかし、その佐賀牛を安くおいしく食べることができる飲食店が鎮西町の早田集落の住民の手で昨年7月にオープンしました。

この地域で畜産を営む宮崎卓氏が、地域内の専業農家に負債農家が多く、「なんとかしないと」という気持ちで地元勉強会を重ね、地元の産品を提供する愛郷ファームを設立しました。

宮崎氏は、以前より自宅で肉の宅配業を行っていたため、愛郷ファームは、宮崎氏より市場価格以下での精肉の提供と、自宅にあった処理機械、ノウハウの提供などを受けています。

直売所のレジや飲食部分のウエイトレス等、地域の雇用が発生しており、夜には佐賀牛目当ての常連客で賑わっています。

●動線の悪さなどふっとんでしまう、肉のうまさ

最初にファームを訪れたとき、飲食部分へどう行ったらよいかわからない、直売所の野菜の種類が少ない、芽の出てるじゃがいもがある等、あまり良い印象は受けませんでした。

しかし、1度目に肉を食べなかったことが悔やまれましたので、再度のぞきに行き、今度は焼き肉ランチを食べてみました。それが、うまいこと、うまいこと。ホントの佐賀牛とはこんなにジューシーでおいしいのか、と感じました。それからというもの、上場地域に行くたびに「お昼は愛郷ファームで」とリクエストしています。

実際、これほどおいしいものを出されると、動線の

おいしい佐賀牛を安く提供
する愛郷ファーム
(愛郷ファームパンフレット)



悪さなど吹っ飛び「いいところだ〜」と感じます。

農産物直売所に不満を感じた愛郷ファームですが、何ヶ月か経つと、品揃えも豊富になり、芽が出たジャガイモなどを見なくなりました。飲食店も好調なようですし、夕方には近所の勤め帰りの主婦などで賑わっています。やはり、人が来る場所では、出荷する人も気を抜かなくなるのだと思います。

●とおちゃん達が「かあちゃんを応援する会」を作った「みなとん里」

「みなとん里」は唐津市の北、国道204号沿にある農産物直売所です。ここに行くと、その品数と、レイアウトの美しさ、見やすさに驚かされます。

この地域で執筆活動を行っている百姓の山下惣一さんが10数年前から言い始め、実現したのが8年前、台風で最初の小屋がべしゃんこになったりしましたが、その頃には参加している人達の続けてやりたいという気持ちが高まり、補助金いっさい無し、借金をして建てた直売所で再スタートを切ったそうです(全てみなとん里の収益から返済済み)。

現在の会員数は約130世帯で、常に出荷している人が30人位です。出荷しない人でも毎日来て、売れ筋商品や出荷数の様子を見て今後の参考にしたり、誰かがいるからと相談事に来たりと、地元のかあちゃん達で賑わっているそうです。

驚いたことに、山下さんが言い出しっぺのとおちゃん達の「かあちゃんを応援する会」ができ、かあちゃんが朝早く出かけた日は自分でご飯を食べる、かあちゃんが夜遅くなると自分でご飯を食べる、裏に倉庫を作るといえば資材を調達して作る等、とおちゃん達も面白がって、かあちゃん達を支えています。

また、一番よかったことは、かあちゃん達が生きいきしてきたということです。兼業農家が主で、とおちゃんは会社員の家庭で、農業を支えているのは自分という自負が生まれ、家庭ではできない相談事ができる場所ができ、家庭でも会話が増えたそうです。

なんといっても、今までは外出するのに後ろめたかったのが、「ちょっとみなとん里に行って来る」とか、「ちょっとみなとん里で会議が」と言って堂々と出かけることができるようになり、ちゃんと収入も得てくるということが、かあちゃん達を生き生きさせています。

加工品の施設も建ててしまった「みなとん里」ですが、農家で加工品の研究を行っているグループはこの

上場地域の中でも多く、農業普及センターに登録されている中でも50を超えるグループがあります。

●商品価値と営業、ネットワークでずば抜けている 甘夏かあちゃん

この地域で加工を行う教祖的存在の山口めぐみさんは、「よかネットパーティ」に参加されている方はよくご存じかと思いますが、地元の甘夏を使った「甘夏ジュレー」を販売している方で、農産品に付加価値を付け、ブランド化し、販売実績も上げているという点で、抜きん出た存在です。

もともと、甘夏農家だったのですが、甘夏の販売にも陰が見え始め、まだ、無農薬が取りざたされる以前に、何とか地元の安心できる甘夏を使って、地域を元気にしたいと試行錯誤されて出来たのが「甘夏ジュレー（現在は甘夏ゼリーと言う）」です。この時、あまり乗り気でなかった山口さんの背中を押し、応援し続けていたのが旦那さんだったそうです。

当初から宅配便を使って1個からの販売を手がけ、現在、同封の注文ハガキが7000通を超えるほどファンは多く、その一人ひとりをデータベース化しています。山口さんはこの仕事を始めてから、人のつながりが出来たことが宝で、これからも大切にしたいと、毎年手紙を送るなどして、つながりを続けることに努めています（※）。今年行われた、唐松おもしろ体験の旅（2日間で福岡から2000人の人を集めた体験ツアー）にも積極的に参加し、約200人の甘夏ジュレー体験を受け入れています。

●次のステップに進むために助けて欲しい

話はずもりですが、農産物直売所ネットワーク交流会で元気なかあちゃん達を見ていて、加工品のグループは沢山あるのに、どうして直売所などはあまり増えないのだろう、もしかすると経営はしたくないけど、自分たちの加工品を販売はしたい、という人達が多いのではないかと思います。そこで後日、加工品のグループに話を聞いてみました。

このグループは、8人で構成され、町の産業祭りで出品したケーキが金賞をとるなど、おいしい加工品作りに熱心に取り組んでいます。しかし、研究し自信作は出来ても、いざ販売するとなると、保健所、商品についての試験、調理施設を作るときの補助金など、細かい部分でどうして良いかわからない、的確なアドバイス、指示を行ってくれる人がいないというのです。

「加工品は良いことだ、やれ！やれ！」と言う人は多いけど、製造側の自分たちが次のステップに上がりたいと思っているときの的確な指示は出てこない、こういう方が多いのかもしれない。

農家の方に加工品を推奨する時、加工品試験場のようなどころがあり、そこで作ったものは1ヶ月間だけ試験的に売る許可がもらえる等、試験的なことができる建物があれば、加工品の研究、販売ももっと活性化するのもかもしれません。

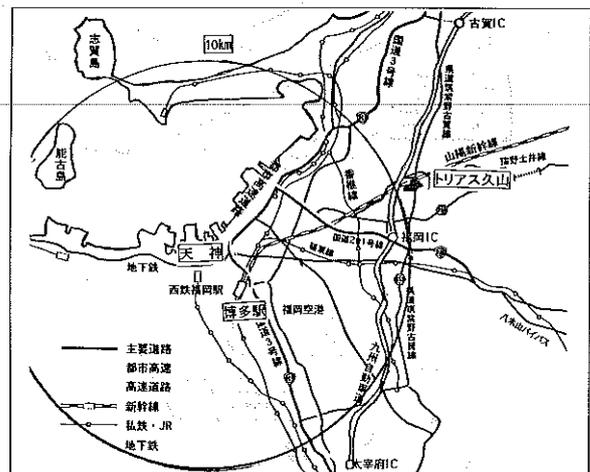
地元が元気になるために、直売所や加工品に取り組んでいるかあちゃん達の熱意を持続させること、また、とおちゃんがしっかり支えてあげることがこれから必要なのだと感じています。

（さわたに まきこ）
※唐津市、東松浦郡の10市町村で、日帰り楽しめるツアーを企画したもの。上場では、甘夏みかんのゼリーづくり体験、シーカヤック体験とみかん狩り、お茶会体験と名護屋歴史探訪、フィッシング体験、唐津焼古窯とやきもの絵付け体験、ハーブの香りと捕れたて魚のゼリー体験が行われた。

「トリアス久山」の元気の素は何か

山田 龍雄

福岡市の中心部から北東へ約10kmの田園地帯に「トリアス久山」がある。そこは約25.5haの用地に米国系の会員制大型店「コストコ」、モール型の商業施設、生鮮スーパー、スーパー銭湯、14のスクリーンを持つ外資系の映画館、ゲームセンターなど、160のテナントが集まる車型のショッピングゾーン（売場面積7万5千㎡）



トリアス久山の位置

である。平成11年4月末にオープンして早や7ヶ月が経とうとしており、交通アクセス条件があまり良くないといった中で土曜、日曜日には多くの客を集客している。

そこで「トリアス久山」が元気の良い理由を探るため、九Qの会メンバー10数名で取材させていただいた。

●テーマパーク的要素が人を集めている

年間目標1千万人に対し、5ヶ月余りで651万人が訪れている。私も福岡市の東区に住んでおり、車で20分程度（天神と変わらない）で行けるところであるため、オープン当初から含めて既に4回行っている。構想段階の時には、立地条件が良くない場所です本当にお客がくるのであろうかと個人的には危惧していたのであるが、順調に集客をのばしているようだ。

その集客の理由としては、やはり映画館やゲームセンター等の娯楽施設や、百円ショップなどの時間消費ができる施設が立地していることが大きいのではないかと思う。映画をみて食事して、2~3店舗を見て回ると3~4時間は充分楽しめる。また、百円ショップは人気があり、全国でも買い物カートが常備している百円ショップは、トリアスだけだそう。ある日曜日の

昼前に、この百円ショップを覗いてみると、若者からお年寄りまで含めて多くのお客が来ており、同じゾーン内にあるどの店舗より賑わっていた。

「トリアス久山」が8月に実施した2千人のお客様アンケートによると、20代、30代がそれぞれ3割であり、実際に若い人が多いのが目に付く。

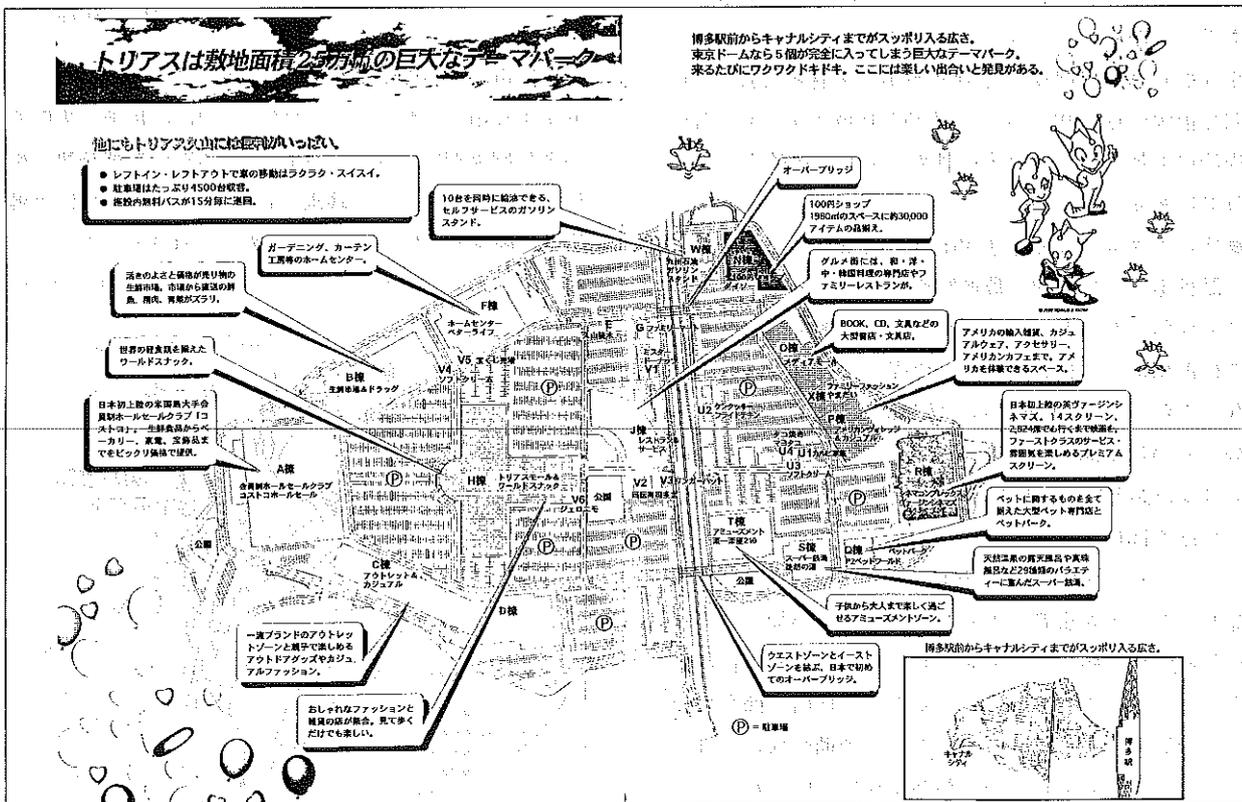
特に映画館では駐車場代が節約できるため、我が家の映画鑑賞の場所はキャナルシティからトリアスへと完全に移行しそうである。

ちなみに、どこからお客さんが来ているかを車の陸運局管轄ナンバーからみると、福岡60%、北九州11%、筑豊9%、久留米6%、その他14%（佐賀、長崎、山口、大分等）だそうである。

●20年の定期借地権での事業

開発地域は元々市街化調整区域かつ農振農用地であったことから、町の強力なバックアップ体制の元に進められ、構想からオープンまで約2年10ヶ月と短期間で実現している。また、事業コストを抑えるため、地権者80人のうち約9割の方とは20年間の定期借地権契約している。

地代は反当たり米の年間収益約8万円の4~5倍を目



25haの巨大ショッピングゾーンの配置図（トリアス久山のパンフレットより）

安で契約しているとのことであるので坪当たり1,100～1,300円程度である。

●テナントを集めやすい賃料体系

開発コンセプトのひとつに「如何にしたら小売業の方が出店しやすくなるか」というものがある。その答えとしては、賃料は売上げの歩合性、最低保証もなしといった好条件を提示している（但し、ガソリンスタンドのみは固定賃料）。これが短期間で160というテナントの出店を実現できた理由であろうと考えられる。しかし、歩合性ではあるが、業種によって基準売上げ額の目安をもっており、これに達成できない店舗については何らかの対応を行っていくとのことである。また、その基準額を超えた店舗は歩合比率を低減するといった優遇策も行っている。

●アメリカンスタイルの会員制店舗「コストコ」

「トリアス」の核店舗のひとつにアメリカの会員制の店舗である「コストコ」がある。売場面積1万3,000㎡の中に商品アイテム4,000種類の品物が倉庫みたいな棚の中に積み上げられている。特に食料品では1リットル容器のドレッシング、30個入りの菓子パン、2～3kgの牛肉ブロックなどがあり、日本のスーパーマーケットを見慣れているものとしては、最初は面食らってしまう。このアメリカンスタイルの店舗では1～2週間のまとめ買いをする世帯や大家族世帯に都合が良いようにも思えるが、通常の日本の購買スタイルにはなじまないのではないかと考えられる。今後、どの程度、この購買スタイルが定着するか見守りたいと思っている。

また、最初「コストコ」でタオル(1ダース)を買ったとき面食らったことがあった。それは全く包装をせず、また紙袋にも入れてくれず、車にもっていけるように切断した段ボールを渡されただけだった。最初は、



敷地内を周遊しているシャトルバス

手間取ったものの、不必要なゴミを出さないといった点ではこの方式の方が良いように思う。

●さらに余剰地に魅力ある店舗展開を予定

用地内には、まだ施設立地ができる余剰地（ホームセンター東側とトリアスモール南側）がある。ホームセンター東側用地には、来年には乗用車展示スペースと低価格スピード車検センターを建設する予定とのこと。さらにもう一方の余剰地には総合家電センター、スポーツ用品、家具売場などいくつかの構想が浮かび上がっているとのことで、益々パワーアップするようである。（やまだ たつお）

「I Love 遠賀川ものがたり」を聞いて

11月末、飯塚市で「福岡県美しいまちづくりシンポジウム」が行われ、基調講演として近畿大学九州工学部学部長の曾根先生による「I Love 遠賀川ものがたり」のお話を聞かせて頂いた。

先生は今まで何度も同じテーマで講演をされているということだった。「歌にも人それぞれ18番があって18番の歌は何度聴いてもいいものです。落語だってそう。」というあいさつで始まった。講演をお聞きしてとても感動した。その講演の概要を書こうと思う。

・13年前、東京に住んでいたが、近畿大学から来て欲しいとの依頼があった。てっきり大阪勤務になるのかと思っていたら九州だと言われ驚いた。それも福岡県の飯塚という山に囲まれた街の大学だという。東京では送別会をしてもらったが、周りの友人には「遠い街なので2度と戻ってくることはないだろう」と言われ、気が重くなった。

・現在、飯塚市までは八木山バイパスを利用して福岡市からは1時間程度で行くことができるが、13年前はそれもなく峠を越えなければ行くことができなかった。峠の上から飯塚市を初めて一望したとき、なにかどんよりとした暗いイメージで、帰りたくなかった。

・峠を下り、飯塚の市街地にはいると、市の中心を流れる遠賀川には菜の花が一面に広がっていた。峠の上からは想像もできない光景だったので飯塚を少し見直した。菜の花にもっと近寄りたと思い、土手の下へ降りてみた。すると不法投棄のゴミの山になっており、家電製品や自転車、バイクなどそれはひ

どいものだった。こんなできごとがあり、ますます東京へ帰りたくなった。

- ・赴任してしばらくしてから、飯塚の21世紀を考えるシンポジウムがあり、パネラーの依頼があった。そこで、遠賀川の菜の花に埋もれた不法投棄の話をして、遠賀川の清掃を呼びかけた。
- ・大学の休暇中、東京に帰り、しばらくして飯塚に戻ってくると、突然公民館に呼び出され、訳も分からず出向くと自分のいない間に「遠賀川清掃隊」が結成されていた。はじめは数人のメンバーで清掃を行っていたが徐々に輪が広がっていった。この頃から毎年1回定期的に「I Love 遠賀川」と題して遠賀川の清掃活動をするようになる。
- ・何回か回数を重ねるうちに、参加者にみそ汁を出してあげたいという声が挙がったこともあったが、具が揃わなかった。そこで若い人たちが走り回り、事情を話すと、タダで豆腐などを提供してくれる人がいた。
- ・おにぎりを出そうという声が挙がり、お米をどうしようかと考えているときに朗報が入った。当時、福岡県では県産米を奨励しており、「県産米を食べましょう」というステッカーを貼ればタダで提供してもらえた。
- ・良い話だけではない。清掃開始の合図である打ち上げ花火と同時にみんなの先頭に立ち、大声でみんなを先導していく人がいた。選挙前の議員だった。最後まで清掃に協力するのかと思っていたら、しばらくして姿が見えなくなっていた。こんな議員の態度を見て憤りを覚えた。

遠賀川の清掃活動は今年も続いている。飯塚市は旧産炭地域で炭鉱の衰退後、市内居住者、市外の人いずれに対してもイメージは悪く、なかなかイメージアップが困難だった。しかし、遠賀川の清掃活動などの活動で確実に飯塚市のファンを増やしていると思う。曾根先生は飯塚市のいいところをよく褒める。「もっと飯塚市に対して誇りをもっていい」と言われる。飯塚市に全く縁のなかった東京出身の先生が、最初きらいでしようがなかった街がいろんな人とふれあい、いろんな出来事があり、今では飯塚一の飯塚ファンかもしれない。こんな先生の話は市内居住者のファンを確実に増やしていると思う。先生は筑豊地域にとってなくてはならない方だと思う。

最初のあいさつで、「18番の歌と同じで良いものは何回聞いても良い」と言われていたが、このお話は本当に良かった。もう一回聞いてみたいと思っている。

(小田 好一)

民間が主催して行政が応援した 「国際住環境サミット in 福岡'99」

開港100周年を迎える博多港のベイサイドプレイスで、10月22日～24日に「国際住環境サミット in 福岡'99」が開催された。主催は国際住環境サミット in 福岡'99実行委員会で、民間の建設会社や設計士がメンバーであり、行政が仕掛けたものではない。

内容は、輸入建材等を扱う企業やグループの展示、住宅産業や環境共生住宅についてのセミナー、行政や有識者等を交えたシンポジウム、その他ガーデニング教室やリサイクル講座などである。

サミットの名称は、来年夏に福岡でも開かれる九州・沖縄サミットが意識されている。意識されているというより、来年のサミット本番にあわせた「国際住環境サミット in 福岡2000」の開催をにらんで命名されている。

シンポジウムでは県の部長クラス、政令市の局長クラスの方も呼んで行われたが、その後の交流会で「民間がこういうイベントを主催して、行政がそこに入っていくというスタイルは、これからのイベントのあり方として仲がいい」という主旨のごとを言われた。結構な評価を頂いたのではないと思う。

しかし、実際には実行委員会のメンバーはへとへとであった。実行委員のほとんどは本業を他に持っており忙しい中での準備であったし、展示ブースなどを売って経費は賄ったものの、ほとんどボランティアに近い状態であった。地域の祭りなどの実行委員会とは意識、関わり方ともだいぶ違う。

実行委員の面々は「これを来年もう1回やるというのはとてもかなわない」というのが正直な感想であった。誉められたことはうれしいが、そのためにまた同じ大変さを味わうのはどうも……、という感じである。イベント成功の嬉しさは当然あるが、苦勞の方が先に立っている。

そこで「民間が主催して行政が応援するのがよい」と言って頂けるのであれば、いいイベントだと認めて頂

けるのであれば、宣伝、人集め、まあ助成までやるかどうかは別にしても、そういった応援をして、パートナーとして開催できるような形にならないかと思う。チラシやパンフレットに「後援」として行政やマスコミの名前を載せてもらっても、後援の実態はわかりにくい。

来年も開催するには、外圧（またやってよ、あるいは一緒にやろうよという声など）が必要のようである。（伊藤 聡）

大学の変革期

平成21年、18歳人口は120万人になる。平成11年時点では155万人であり、35万人の減少となる。今の進学率は55%であるから、85万人くらいが大学・短大に進学している。この入学定員の枠が維持されるとすると、平成21年の進学可能率は70%にまで上がり、4人のうち3人までが大学へ進学する時代がくるということになる。確かに昭和60年以降、進学率は徐々に上がっており、進学率の趨勢だけで見ると70%に手が届きそうな勢いである。受け入れ側の大学はどうしているかということ、顕著なのは、社会人大学院をはじめと公開講座やオープンキャンパス、はてに海外からの留学生を半分にする大学など、あの手この手で、学生を確保するという手段が講じられている。さらに、私立大学では、著名な教授、業績の高い研究者など、学生（社会人も含めて）の確保が期待できる人材には一所懸命であるが、そうでない研究者は、東大であろうとどこであろうと、全く見向きもされない。5~6年前の話ではあるが、九州でも教授の第2の就職難の話は聞いたことがあった。

若者が減れば、大学が余り、教官の職が減る。職が減れば、後継者の競争によって、教育の質が上がり、結果大学の質が上がるということになるのかどうかは、分からないが、教える人たちには危機感が結構あるようだ。大学が変われば、色んなことに波及し、新しい産業も生まれるだろうと、大学移転の仕事をしなが、最近こんなことばかり考えている。

（山辺 真一）

所員近況

■ 手作りのXマス・イルミネーション

福岡市郊外の粕屋郡宇美町にある神山手という新興住宅街では、街路樹がライトアップされていて、宅地内の丘の上には5mぐらいのクリスマスツリーが飾ってあります。これらは、自治会のクリスマスパーティーのイベントでの雰囲気づくりの一環としてはじまり、住民が協力して自分達で飾りつけたものだそうです。しかも、家の外にもクリスマスの飾り付けをしている家もけっこうあります。豆電球は自治会が大量に仕入れた物を安く購入するそうです。家の飾りは強制ではないらしく、それでもピーク時は120戸もの家が飾るので、両側の家がズラッと飾る豪華な通りもできるそうです。わざわざ周辺の市町村から見に来る人もいて、家族連れが、かなり多いそうです。一際目立つ飾り付けをしている家のおじいちゃんは「寒いので雰囲気ぐらい暖かくしたいから」と言っていました。確かに街路樹や家の飾りがなかったら、かなり暗そうな所なのでそれだけでも効果大だけど、ご近所の人とのコミュニケーションもとれて一石二鳥だと思いました。見頃は毎年クリスマス前の1~2週間だそうです。

これは友人から教えてもらった所ですが、かなりワクワクできるので、お薦めです。

99年は、私からの多大な迷惑に対応してくれた方々へ感謝致します。2000年のモットーは『人に優しく、自分に優しく』です。何事にも大きな心で接していただけるようがんばりたいと思います。（佐伯 明日香）

■ タオルとモラルをもって温泉へ

私は根っからの温泉好きである。暇さえあれば、というか、暇がなくても寝る時間を削ってまで、湯を求め友人と車を走らせる。

我々の行動時間は夜が多い。夜の方が友人たちとの都合もあうし、道路もすいていて好都合なのである。しかしそうになると、入ることの出来る温泉に限られてくる。福岡を11時ごろ出発しても、着く頃は大体深夜の1時か2時。そんな時間にあいている温泉は数少ない。しかし、我々は発見したのである、24時間開いている魅力的な温泉を…。

その場所は福岡から車で2時間弱（←深夜の走行）。とある温泉町にある。そこは、旅館やホテルの風呂で

もなく、温泉施設でもない。はたまた、(夜遅いと)店の人もいない。ただそこには、あたかも別荘のように8つの風呂場が点在しているだけである。

というのも、ここは入浴する人の“モラル”が必要な温泉で、入浴者の自己管理で利用するのである。そのため料金も安い。たくさんの人に安価で利用してもらおう、というのがこのウリである。

8つある風呂のうち、入浴していないところは窓が全て開けられており、風呂にはお湯が入っていない。使われていない風呂のうち、自分たちが入る温泉を選んだら、まず中に入り窓を閉める。次に、風呂の栓をしたのち、指定された金額をコイン投入口に入れる。そうすると、約30分間、蛇口から勢いよく温泉がでてくる。風呂がたまのを見計らって、着ているものを脱ぎ、いざ入浴、といった具合である。

その風呂は、サウナや打たせ湯などが完備された大浴場といったものではなく、定員4人ぐらいの風呂である。しかし、気の合う仲間だけしかいない風呂は、まさに裸のつきあいであり、何も気兼ねせずにゆっくり過ごせる。ただし、入浴は1時間と限定されている。

入浴が終わると、お湯を全て捨て、窓を開け、電気を消す。あたりまえのことであるが、“発つ鳥跡を濁さず”である。特にこの風呂は、誰にも気兼ねせず自分たちの好きなように利用できる。それだけに、利用者それぞれのモラルが必要となる。

温泉好きな人に悪い人はいない、私はそう思う。このような温泉が九州各地に出来ればいいと願う。

※遅くまであいている温泉を知っている方はぜひ教えてください。少々遅くても構いません。行きます。ちなみに私の車には温泉セットなるものが常備されています。温泉好きな方はぜひ一緒に。

(井上 順之)

幻の日本シリーズ第6戦チケット

世の中とは不思議なことが起きるものだ。私は通常、電車通勤をしているのであるが、その日に限って何故かバスに飛び乗った。そして、私が座った隣の人我突然、私に話かけてきたのである。「すいませんが、あさってある日本シリーズの第6戦のチケットを4枚持っているんですが、どうしたら良いでしょうか。どうも今日で決まってしまうような気がします。これを早く処分しないといけないのか、記念で取っておくのか悩んでおり、これでは今日一日仕事になりそうにありません。」

<p>99 日本シリーズ 【第6戦】 福岡ダイエーホークス vs 中日ドラゴンズ ☆主催：株主総会 日本野球機構 ☆注意：日本シリーズは夜をえず中止の場合、翌日に繰延べされ 本券も無効となり、ドバイ券となり日程変更による返金は一切行いません 1999年10月30日(土) 15PM 試合開始 4:15PM 開場</p>	<p>G009511 2-8070-4007-003 99日本シリーズ 【第6戦】電球 福岡ドーム</p>
<p>福岡ドーム G009511 2-8070-4007-003 81030 991030 ※入場：6:30ゲート 25~33道路 ※自由席は立見になる場合がございます ☆観戦券が決定した場合、それ以後の入場券は権限決定の翌日より 1週間前の子供3割戻しのダイエー及びLソフトにて換戻しを行います ☆お問合せ：(株)福岡ドーム092-847-1536</p>	<p>1999年10月30日(土) 8:15PM 試合開始 外野自由席大人 (高校生以上)</p>
<p>福岡ドーム 7番2</p>	<p>¥1,500(税込)</p>

幻の第6戦チケット

このような会話から始まり、私も記念に取っておいたらどうかと勧めたりしていたのであるが、相手の方が「これも何かの縁なので、外野席の2枚をさしあげます」と言って下さった。私もこれも何かの縁であろうと思い、遠慮なくチケットをいただくことにした。チケットをもらった瞬間に第5戦はダイエーが負けてくれることを願ったわけであるが、あっさりダイエーが完勝し、第6戦観戦の夢はついてしまった。今、この第6戦のチケットは我が家のアルバムの中で静かに眠っている。またダイエーがリーグ優勝するときに思い出すことになるかも知れない。

また、いただいた方に早くお礼をしないと思っているのであるが、なかなか会う機会がない。

(山田 龍雄)

編集後記

100年後の日本人の顔の変化をトレンドで予測したものがある。あごが細くなった逆三角形の顔だが、何だか私に似ている。人の後天的な情報が遺伝子に刻まれるなら話はわかるが、自分の子などは私よりも未来人的な顔にはならないのではないか。予測は前提条件によっては予測遊びになる。それはそれで楽しいのだが。(伊)

(編集・発行)
 (株)九州地域計画研究所
 〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
 TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)
 (株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-6942-5732
名古屋事務所	TEL 052-265-2401
東京事務所	TEL 03-3226-9130